

「神奈川県立近代美術館 100年の会」が受賞！

鎌倉市第1回景観づくり賞

取材：広報委員会

「神奈川県立近代美術館 100年の会」(以下、近美 100年の会)が、今年3月に鎌倉市の第1回景観づくり賞を受賞しました。それを記念して、この美術館を設計した故坂倉準三氏の坂倉建築研究所最高顧問阪田誠造さんの早稲田時代の同級生で、鎌倉在住の松谷菊男さん、近美 100年の会の会報を担当している日本大学の大学院生、加藤明日香さんと川崎宇希子さん、景観づくり賞の審査委員で、鎌倉市景観アドバイザーの森博さん、そしてJIAや建築学会をバックに建築の保存活動に関わっている近美 100年の会事務局長の兼松紘一郎さんに、これまでの経緯や今後の課題などについてお話を伺いました。



鎌倉近代美術館ピロティ

神奈川県立近代美術館の2階喫茶室にて

受賞について

兼松 受賞理由に大変感激しています。特に活動のスタンス、組織的にやっていること、鎌倉市民だけの活動ではなく、周りの人が市



松谷菊男氏(左)と兼松紘一郎氏

民に向けて発信している、それが評価されました。また、近美が鎌倉になくてもならないものとして受賞したことは、鎌倉市が県に対してメッセージを送ったようにも感じて、ありがたいことだと思っています。

松谷 タイミングがすごくよかったです。まして、第1回目の受賞ですから、これで近美 100年の会が社会的に認知されたと思っています。

会をつくるきっかけ

兼松 発端は、阪神・淡路大震災。耐震改修をしなければならないし、50年を経てメンテナンスもしなければならない。かといって県の財政も厳しいし、史跡の保存で改修も難しい。そして、八幡宮との借地更新が2016年に控え、葉山に新しい美術館を作ることもあり、存続が危ぶまれていました。そこで、建築界や美術界に声をかけ、保存のために60名ぐらいの発起人でスタートしました。会長には、坂倉準三夫人坂倉百合さんが美術史家・高階秀爾氏にお願いに行ってお下り、引き受けても

らいまして、最初に鎌倉でシンポジウムを開きました。松谷 ちょうどその時期、クラス会があって、阪田君から「知らないの？美術館が危ないので、シンポジウムをやるから来て」ということで、初めて危うい状況を知りました。その時、はじめて兼松さんに会って、その人柄に惚れちゃいました。雰囲気というか、ものの進め方がゆったりしていて、僕なんかせっかちだから、兼松さんを知ってゆったりするようになりましたよ。(笑)

兼松 てれちゃいますね。(笑)そう言われると本当にうれしいです。今はすっかり飲み友達ですが、松谷さんは、鎌倉の人達に声を掛けて下さり、60名ぐらいの会員を入れてくれました。

これからの活動

松谷 鎌倉に住んでいる人は、今でも近美が借地権問題で危ないことを知らない人が多い。そこが問題です。また、近美はいい美術館ですが、建物のストーリーが分からない。戦後間もない時、心のよりどころを作ろうという強い思いで創られたことや日本初で、世界で3件目の近代美術館、H鋼が池に入っているのが日本らしさを表現しているなど、建築のものがたりをぜひ教えて欲しいですね。

兼松 おっしゃるとおりです。これからは、鎌倉にいる人と連携をとって、市民だけではなく子供たちにも、建築のものがたりやこの建築が天気、時間、季節ごとに変わる魅力、すばらしさを伝えていきたいと思っています。

日本大学駿河台キャンパス建築史・建築論研究室にて

川崎さんは建築ジャーナリストを目指したい

川崎 会報の創刊号は、神奈川大学の本間さんが担当され、2号は日本大学の担当で作るように言われましたので、ぜひ自

分の手で会報を作りたいと思いました。会報作りを通して、自分で作品を創るより、よい建物を人に紹介するのが、自分に合っていると感じ、建築ジャーナリズムを目指しています。そのためには、まず歴史を勉強しなければと思い、近代史を専攻しました。

加藤さんは、坂倉さんを研究

加藤 将来は、設計に携って行きたい。坂倉さんの建築作品と設計手法を研究し、その手法が坂倉研究所にどのように影響を及ぼしているのかを修論としてまとめています。近美の会の活動や会報の編集を通じて深く坂倉さんを知り、また坂倉事務所の方を知ることができ、とても刺激を受けています。近美のこれまでの改修の経緯を論文としてまとめました。照明計画などが大きく変わっていますが、当初の設計意図を汲み取りながら、学芸員もしっかり建築を学び、そして建築家と打合せをしながら作り上げていったことが分かりました。

近美の空間・展示の魅力

川崎 やっぱり池に面していて、季節を感じられるのがすごくいい。八幡宮を歩いているとき、チラッと見える、異質なものがうまく共存していると思います。運営自体が魅力的というか、展示もフレキシブルでとても見やすいし、企画した人のおいというか、気配が伝わってくるようです。

加藤 他の美術館に比べ、規模は小さいですが、作品をゆったり鑑賞するのにちょうどよいスケールですし、展示内容も地域密着型で、とても共感がもてます。壁画も復元されました。

受賞について

川崎・加藤 正直びっくりしました。会報やホームページで一般の人たち、特に鎌倉に住んでいる人にアピールして、ぜひ入ってもらいたいと思っています。やっぱり、近美の保存には、建築関係の人だけではなく、鎌倉の人の力が大きいと思っています。



加藤明日香氏(左)と川崎宇希子氏

鎌倉のアトリエにて

景観アドバイザーの役割

森 景観アドバイザーは、平成7年に制定された都市景観条例の中に定められていて、都市景観の形成を推進するために、景観資源の評価や景観形成の事業への協力が求められて



森博氏
(森ひろし建築設計事務所)

います。任務は2年で、前の委員のかたは、「鎌倉景観100選」を選び本にまとめられました。私たちは、景観形成の事業への協力ということで、顕彰制度をつくることになりました。今回の「景観づくり賞」という名前から、公募要項、そして選考までたずさわりました。

選定の過程

森 第1回目の賞ということで、市民の地道な活動を取り上げようと考えました。有名な建築とか古い建物とかをはじめに選んでしまうと、何だか建築賞的になって、市民から賞が遠ざかってしまうと思い、あえて「づくり」を入れて「景観づくり賞」として、活動も賞の対象になるとしたのです。活動の分類を「守る」「つくる」「育てる」という三つに分けて選考しました。近美は「守る」の中に入りますが、当初「近美100年の会」は一般市民からみるとまだ活動が知られていなくて、実は私も知らなくて、脇にあったという感じでした。しかし、会報やホームページなどによって、活動内容や会員の広がりなどがあきらかになるにつれ、活動の重要性が認知されて、受賞につながったと思っています。

これから

森 今回の受賞で、ピロティーから見る池の風景のすばらしさやそれを残していくことなど、景観づくりの意義が市民に広く伝わっていければ良いと思っています。この機会に私も「近美100年の会」に入会しましたので、それをめざして活動をしていこうと考えています。

初めての取材記事で、2ページで足りるのではと思っていましたが、結果的に、インタビューの内容をかなり割愛させていただいたことをお詫びいたします。また、お忙しい中快く取材をお受けいただきありがとうございます。次号でも関連したテーマを取り上げたいと思っています。

(取材 広報委員：櫻田修三・山本 俊雄 文：櫻田修三)